



—秋田の名作を尋ねて—

マタギ小説 熊谷達也 『邂逅の森』

北条 常久

(あきた文学資料館 名誉館長)

大正時代の話である。能代に流れ込む米代川の支流阿仁川を遡ると比内川と打当(うっとう)川に別れる。その一方の打当川の源流の地が秋田県北秋田郡荒瀬村打当というマタギ部落である。近隣では廃村に追い込まれた村々も珍しくなかった。しかし、打当はマタギが支えた。春にはゼンマイ、蕨などの山菜、夏にはイワナ、ヤマメ、サクラマス、秋にはマイタケを中心とした茸類という山河の恵みが豊かであったが、この地では珍しい物でもなかったから、現金収入にはならなかった。男たちは夏場に小作農と樵(きこり)として働くことによってわずかな収入を得るだけであった。

そこで、集落の男衆は冬場にはマタギとして山の獲物を獲って生活を支えた。

山の獲物は、オコジョ、野ウサギ、ムササビ、テン、タヌキと多数いたが、熊と羚羊(カモシカ)は大きな収入となった。日清、日露の戦争が続いたために軍用毛皮として貴重な収入になった。特に熊の胆嚢(タンノウ)は、万能薬として一匁(もんめ、1匁=3.75g)が米二俵にもなった。

『邂逅の森』(文芸春秋、平成16年、直木賞受賞)は、その打当のマタギ集落の松橋富治の生き様を追う、人間と自然の共生の物語である。

彼の狩猟の物語は、山形県の月山麓の肘折温泉から深く入り込んだ山中から始まる。秋田の

マタギが遠い山形で狩りをするのを旅マタギという。山深い北秋田の地では、家の生活を支えるために、マタギが多く、打当に接している比立内や根子(ねっこ)でも事情は同じであったから、猟師の数に対して猟場が不足で、県外まで足を伸ばすマタギもいた。松橋一家も父の代から出稼ぎ猟で生計を立てていた。

富治自身16歳から旅マタギに参加した。鈴木善次郎を頭領(スカリ)として父の富左衛門、六つ年上の長兄富雄、さらに柴田万吉の五名で、肘折温泉を拠点として、毎年1月から2月一杯の厳冬期に旅マタギをしていた。

富治は、ここでマタギの掟と禁忌を学んだ。しかし、父富左衛門がその掟を破ってしまう。ミナグロといわれる、月の輪もない全身真っ黒な熊がいるが、それは山の神様の使いで化身である。もし間違っただけでミナグロを獲ってしまったら、以後マタギをすることはできない。富左衛門はマタギを捨てた。その上兄の富雄が出稼ぎ先で大怪我を負い、猟ができない身体になってしまう。ために、旅マタギのチームの組めない富治は、鉱山で働くことになる。彼が鉱山で働くようになって間もなく、第一次世界大戦の戦争景気で銅の価格が値上がりし、賃金も値上がりし、阿仁鉱山の仕事に精を出した。しかも、彼には、村の地主の一人娘文枝という恋人もでき、

妊娠までさせてしまう。しかし、娘には婿入りを承知している帝大出の医者が出て、彼は荒瀬村に診療所を開設することになっていた。

富治は、阿仁鉱山と経営を同じくする山形県大泉村の大鳥鉱山に転勤させられる。彼は、ここで下役の難波小太郎と一緒に山に入ると、マタギの習性が眼を覚まし大きな熊をしとめ、熊の胆を薬屋に売ったりもした。

大正7年1月20日に、大鳥鉱山が大雪山崩に襲われ、死亡者151名の大惨事が発生した。富治はこれを契機に熊を求めて秋田、山形の県境の深山に入り、獲物を追う。深山に入るのは地元の猟師との獲物を巡った諍いを避けるためであった。そこで信頼もでき地元のマタギとの交流もできる。

「俺あ、熊田の滝沢鉄五郎だ、おめえは？」

「松橋富治」

富治は、雪崩事故からこれまでの経緯を、包み隠さず話すことにした。

「すて、シシ（熊）が獲れたら如何（なじょ）すんだよ。鉱山に戻るのが」

「いや、鉱山には、もう戻らねえ」

答えて自分でも驚いた。驚くと同時に、昨日と今日と雪山を歩いているうちに、心の底ではすでに結論が出ていたことに気づかされた。

二人で熊の潜んでいるブナの木の前に向かう。鉄五郎の銃はシシのど真ん中を射通した。この気分のよさは何なのだろう。ほぼ同等の技量を持った猟師と一緒に、山の中にいること自体が嬉しいのだった。善次郎や万吉、父や兄と一緒に狩りに臨んでいた時に近い安心感と楽しさがあった。

富治がマタギとして再起するのであれば、故郷打当が最適であるが、阿仁周辺では、獲物の

カモシカが枯渇して、大正14年狩猟法が改正され、狩猟獣から除外されて保護の対象になった。

それで彼は、小太郎の手引きで八久和川の集落に住もうとしたが、余所者（よそもの）が村に居ついて狩猟組を作りたいとなれば中々容易なことでない。彼は、獲れたばかりの熊に縄をかけて引きずって集落の区長佐藤重吉の家を尋ねた。しかし、話はすぐには決着がつかなかったので富治は熊を置いて引き上げた。村の女と結婚し、村で所帯を持つなら話は違うということで、富治は村の娘イクと一緒にいる。

富治が渡り鉱夫としてやって来た好景気の大鳥鉱山は、大戦終結後の世界的不況で銅の価格が著しく値を下げ、大正11年に閉山した。余所者である富治には入会権もなく、集落の山にも勝手に入ることもできなかった。富治はマタギの仕事で獲る毛皮と熊の肝で金を稼ぎ、獣の肉で飢えを満たした。彼には山の神がついていたのか、マタギで生活の道を歩んだ。

ある日のことである。

富治は、60貫（1貫=3.75kg）以上ある大熊に出会った。山のヌシである大熊は全身の体毛を膨らませて山を登って来た。熊との距離が五間ぐらい近くなったら、その瞬間に引き金を引くのである。富治は、このような熊のヌシとは一生に一度しか会えないと思い、この手で引導を渡してやりたいという猟師の本能的な欲求が身体の中に渦巻いた。富治は、自分には山の神が乗り移っていると意識した。今熊を仕留め、殺した熊の魂に乗せて山の神様を本来の居場所に帰してやりたいと思った。このように深閑とした森の中は人間と山の神と熊が邂逅して一体となっているのである。これがマタギの世界である。